



重修真書太閤記

八編

一



柳菴栗原氏校訂

重修
真書
太閤記八編

東都書肆 知新堂發兌



重修真書太閤記八編總目錄

卷之一

森勝藏小田切口亂入の事
并上杉家諸將水中防戦の事

卷之二

森勝藏上杉家を破る事
并上杉方諸將大敗軍の事
遠藤但馬守智謀の事
并登坂安田等勇戦々死の事

卷之三



上杉景勝魚津表歸陣の事

并馬淵浮見又傷始末の事

柴田勝家遠謀を用ゆる事

并溝口半左衛門使節の事

卷之四

魚津城中諸將會合の事

并中条越前守軍慮の事

勝家謀城中へ来た事

并越前守軍慮相違の事

卷之五

佐々内藏助本丸を焼事

并吉江龜田等信義討死の事
竹股中条猛戦自害の事
并魚津落城宮崎勢後詰の事

卷之六

龜田小三郎老母自害の事

并光秀逆心北國へ聞ゆる事

柴田勝家歸陣の事

并上杉勢勝家を追事の事

卷之七

諸將清洲の城に會合の事

并柴田佐久間内謀の事

秀吉理言諸將感伏の事

并勝家長濱所望の事

卷之八

瀧川一益柴田勝家合の事

并秀吉堪忍の事

秀吉光明皇后の譬の事

并柴田密計下知の事

卷之九

秀吉長濱を柴田へ引渡の事

并森長一人質を殺す事

信長御法事招状の事

卷之十

并勝家一益旅宿相談の事

紫野大徳寺法事執行の事

并焼香前後争ひの事

附秀吉孝忠を論ぐる事

卷之十一

瀧川兩虎相争計策の事

并一益勝家を計る事

瀧川一益奸計の事

并諸將會合の事

卷之十二

勝家秀吉を討んとを謀る事

并一益勝家を諫る事

柴田龍川以下諸將歸國の事

并信長公葬式行列の事

卷之十三

龍川柴田内謀を定る事

并不破原前田金森上京の事

勝家和平を望む事

并秀吉返答の事

卷之十四

前田利家時運を考ふる事

并長九郎左衛門尉諫言の事
長九郎左衛門尉由緒の事
并長谷部信連の事

卷之十五

隠亡浦右衛門由緒の事

并長九郎左衛門尉枕膳祝義の事

大谷慶松長濱へ來る事

并神谷木下伊賀守を諫る事

卷之十六

柴田伊賀守秀吉と一味の事

并秀吉諸方年禮の事

信孝籠城三臣忠諫の事

并秀吉濃州表進發の事

卷之十七

柴田瀧川出張延引の事

并信孝偽く和平を望む事

秀吉濃州歸陣の事

并佐久間玄蕃柴田伊賀守を諫る事

卷之十八

信孝北國へ謀合を籠城の事

并柴田伊賀守病死の事

美濃守秀長岐阜を圍む事

卷之十九

并信孝柴田の援兵を望む事

柴田勝家軍勢催促の事

并前田父子密意を残し出陣の事

前田孫四郎先陣を望む事

并北國勢會合進發の事

卷之廿

秀吉勢州表進發の事

并龜山落城瀧川勢戦死の事

瀧川小旗不思議の計の事

并峯の城一封の書翰退去の事

卷之廿一

瀧川從來名逆寄の事

并中川瀬兵衛奮戦の事

長岡忠興中川を救ふ事

并瀧川勢敗走戦死の事

卷之廿二

於次丸秀勝衆名發向の事

并瀧川夜討軍配相違の事

秀吉謀る瀧川を圍む事

并瀧川主從來名退去の事

卷之廿三

卷之廿四

秀吉賤ら嶽砦人數配の事

并秀吉密ら濃州より歸陣の事

信孝二度援を勝家よ乞事

并勝家謀計宇野の事

卷之廿五

宇野忠左衛門山路將監を誘勸事

并山路將監反心の事
山路將監今井野村を試むる事
并今井野村使節の事

卷之廿六

今井角左衛門尉内通の事
并山路將監北越の陣へ馳込事
秀吉山路妻子刑罪の事
并山路佐久間軍談の事

卷之廿七

佐久間中入之謀術を述る事
并勝家玄蕃が血氣と止る事

兼山羽柴中川を諫る事
并越前勢中川が陣へ寄る事

卷之廿八

中川主従勇戦の事
并神戸中川が陣を焼事
中川頼兵衛戦死の事
并佐久間凱歌不吉を示す事

卷之廿九

高山右近開柵諸里震動の事
并黒田官兵衛深慮の事
黒田長政孝心勇氣の事

并嶋左近智謀斥侯の事

卷之三十

嶋左近一騎大垣へ注進の事

并佐久間驕勇三士不快の事

黒田主從賤ヶ嶽援兵の事

并後藤又兵衛佐久間を謀る事

重修真書太開記八編總目錄終

重修真書太開記八編卷之一

森勝藏小田切口亂入の事

并上杉家諸將水中防戦の事

爰は信州更級の領主森勝藏長一は三左衛門可成の嫡

子に今年天正十年ハ廿六歳あり遠藤大隅守胤基ら

六郎左衛門尉胤縁乃長男美濃侍の中少就と尤武邊比

老武者お終ハ森よと副信州小在て万事を監察とよ

と信長とりのけ仰られかど今度の軍も別て大事と

心を盡くし出張と也森が軍勢三千七百餘騎川中嶋

を打立と犀川をより小市大久保を過飯繩の山法麓

より野尻の湖の下流より従ひ關川口に打入り小田切小陣を取上杉方よりかめと期したるに於て安田總八山岸右衛門尉を先鋒とあり中軍は登坂刑部少輔安田筑前守蠣崎彌五郎以下二千餘騎後陣を新津丹後守小田切口の川より東北に陣を張るに終を切り入り織田方にいそいで森が長臣各務伊織落合右衛門を先陣とし二の手に森勝藏長一を中とし大塚主税森采女左右に連まて雁行しとあり後陣は遠藤大隅守長蛇の備を立と嚴重に陣をさる小荷駄は伴久左衛門尉是を奉行して川手に付て備えしり上杉方より森が軍立よりつとまらば並々合戦したらん少の勝利を得るをあらん

かゞびのや川を渡して軍をへいと逸雄の若りのども既に馬を打入んとありかゞの折しも五月下旬のとたん大雨あがり降とハす流と川水さして高うらびかゞる處へ新津丹後守安田筑前守馳來り川を前々當たる軍場ハ敵は川を渡せ半渡へ亂さるるに於て勝利をありあれ斯る舉動はかゞらばと諫めしにより先手は進しり此共馬の鼻を引返り理あり物をあの二人は謙信の旗本は在て度々の戦場を經武篇場數の古兵あり果して若手のりけり新津安田は諫めらばあをり見合をるを織田方にて上杉方よりや引色あたらうり此勢は乘但ひと揉より崩さるとひり

思ひ故強之驚く色もあく鎗を横たへ逃る味方を延
 追來る敵を防ぎたり森勝藏ハ味方もや川を渡して
 戦ひすてふ酣あらんよりの追余所は扣ゆべき繼けも
 然共と云より早く馬を飛して進みける處へ味方敗軍
 して崩れぬ、是れをさしおりの共我を手本とせよや
 と鎗を打ちあひて馳たちて寄りをして大將の手を
 して軍に給ふぞや誰りハ命をたふすべきを爰まで死
 や人々と互にいせられ又り返して戦へば上杉方
 にても是こそ大將よ森勝藏よあまのよと攻付たり
 森が二の手の足輕とも筒先をさしむけく百餘人も
 ても振を打立まを上杉方矢庭は五六十人うち倒され

と色めくを大塚主税森采女得たりやあふと聲切け無
 二無三は突と切る上杉方よくあされまどひ既ふ
 此陣破られゆぐ見え處へ蠣崎登坂夜又のとく荒
 はあはれを狂ひ中をれば森が兵士と散々切立られ
 引色し見えけま森長一あは追勝たる軍あり何とて
 さうたぬく見えたりをす、そや者どりと鞍乃上は立上
 りて下知まを安田總八郎山岸右衛門たりぬ見付あ
 れるを森勝藏と遁ますと聲を上と馳寄我先みと突
 立れら森が侍ども爰をせんど切合突合川の中より
 追上追込火水はありて戦ふ中にも安田總八郎大塚
 主税と鎗を合を命を限りと突合々々が安田右の高股

二箇處薄手を負ちや危しと見えけるを安田筑前守
 弟うさせて叶えんと馳合をて突つてのる蠣崎彌五郎
 ちをを見と味方上鎗あつてつら引かくと聲を上て
 突りくる森が軍兵猛けれども安田兄弟に打立られ合
 戦まぢつ難義ありと聞えりかば遠藤大隅守伴久左
 衛門を呼近付り久左衛門を我備を見あつ
 めひと給ゆへ若き大將の軍の様見と参らんとた
 して三百餘騎大山北崩り如く押出たり上杉方に
 ても新津丹後守をて遠藤大隅守よ是ハ美濃あて名
 を得し老兵を某切つはで切あふまじと手勢勝りて五
 百餘騎真黒ありて打合たり森采女ハ新津を目小

け横合より打つてのる登坂刑部少輔を流し
 たりに馬をけりて采女を打んとせり合たり森ハ前後敵を
 うけ追つ返り戦ひくろが薄手負く引返り各務伊織入
 替りて討つれれば落合も各務を助け續きたり丹後守
 ハ少輔慮外ありと聲かけ鎗を合各務落合をよ
 疲せり是非あり左右へ物もれしを丹後守のさじ
 と及びおし打つる太刀はく落合右衛門をかくれを
 切れ馬より落るを郎等ども肩あけて引く行登坂新津を
 せを見追んとす終日水中なるせんうとあり終日の戦
 ひ双方牛角あつて勝負つら終日と日まき久黄昏に及ハ

水中のよく浪急まりて足の立處も定らぬ、引かれ東西の岸に駈あがり互に息を継ぎ明日まで見参せんと色代しその日此軍を止し上杉方に手負百三人打死五十七人さきども名は侍一人もぬ、森が手に落合右衛門手と負いのとそもの外八十九人、雑兵あり打死廿三人とかな、上杉方の記録より森勝藏毛利河内守五千餘騎は越後へ亂入せし處景勝妹婿上条民部少輔頼春七百餘騎に打て出合戦し早馬あて越中へ注進を景勝これを聞き一先本國へ歸陣ありける處信長生害のよりに森も毛利も信州へ引返をそのうち景勝信州へ打出とあり

重修真書太閤記八編卷之一終

重修真書太閤記八編卷之二

森勝藏上杉勢を敗る事

并上杉方諸將敗走の事

彼を知是を知りの必勝とら孫子の辭にして百戰百勝の術あり爰に森勝藏長一ハ柴田勝家加勢として越後の國へ亂入し上杉の本城春日山を襲ふべしと勇々名んぐ出張せしに上杉家も々不識菴謙信の調練を名將勇士林の茂さが如く處々仕付置し斥侯の兵士昔のまゝ小掟を守りて在けるにより小田切口の一戦利あり相引し引けるを如何にも残念ありと勝藏大に憤

發し諸將を集めて評定しける上杉侍の軍立尋常か
 らば去バ昨日の戦味方あひひの外に利を失ひしを上
 方の聞も口惜く傍輩の心の中も耻うし、明日ハ長一
 小勢を以て敵を欺き川より此方へ誘引よを大返しよ
 返し合を中に引包んぐ無二の一戦をあらさむと思ふ
 らのりよ面々乃異見を聞わゆと怒り聲よ云出々せむ
 遠藤大隅守進出でて森殿の軍略實は然るべく聞えし
 只仰の如く謙信十四歳の時より父の讎椎名神保なり
 舎兄の仇ハ沼田父子三人なり是を討ねら男の道なく
 びと思ひ立十六歳の時に國中の亂を切静め十八歳小
 して家督を繼廿歳の時枋尾より府内へ入をれより三

条の城を攻て沼田常陸介を討廿二歳ありて沼田の子
 共黒田金津を誅し廿九歳の時始り越中へ出馬し廿四
 歳に越中松倉より出二箇處の城を攻落し放生津へ
 打出神保長平椎名康種江浪三河守以下十六人を誅し
 其首を旗檀野にかけ並べたり是時にいさ父兄の仇
 を復し多年の本懐を達して歸國ありこれより後弓矢
 の勢震雷の如く兵士の利と猛虎の如く關八州を并吞
 川中嶋四郡を争ひ北条を怖し武田を懲る其軍法の
 正しく籌策の密あると心も詞も及むれむさきバ昨日
 の軍に新津礪崎山岸登坂何も花々敷働したる森殿の
 謀略あり手軽く上杉勢を誘引出されんと抑りし

御手段にて承てたしと申すに勝藏長一されど
其手勢四百計に軽く夜の間に川を打つ上
杉方の先陣に向ひ鐵炮少く放ちかけし上杉方に
てゆるり其終つハ捨あくる必我等に向ひ戦を挑
むひひあんなの時長一と打負し体よりあへ早
く人数を引上川を打つりひひあは上杉勢我等をも
らさすと申すに隊伍をささし追かけしべしよさ
程に引付て面々の勢三方四方より興り立上杉勢い
うふ猛しとの進退度を失ひしべし是我等が必勝の計
と存し付ては處也といふは大隅守熟とこれを知り
し森殿の軍法より聞えしたゞしは上杉

勢森殿を追うけ川をささし追かけしべしよさ
万一川をささし不し時のたれよへは勝藏殿ハ何
にも三四百あし手軽く向ひ給ふべし大塚主税森米女
乗原甚右衛門ら五百餘騎は川端へ伏かくしから
各務伊織落合右衛門伴久左衛門川を渡りて上杉勢の
後に向ふて埋たりたりと一手ハ川より東に一むら
竹の茂れる處を楯よあし静まりあへりて扣り其後
勝藏長一を四百餘騎を引率し子丑刻より打立ていと
物開し川を打つて夜の明るを待居たり上杉方には
初度の軍に勝しうは織田方の侍ども夜打あや寄んま
らん用心をさしと一手々々し組分終夜篝を焼拍子木

打夜廻りけき森が勢どりの川をハ渡アらまじも
 埋伏をへき處をしらば然どもあの終止へきまあじ
 せび大塚と森とら左右に引分れ雁行に備えて鯨波を
 あげ上杉方の先鋒に向ふ鐵炮を打ちけき上杉
 方にも敵ハ川の渡りつるぞ油断せしと口
 惜さと聲々よかりき叫んで切掛れ森が勢も手軽く
 引揚んとかき終に火花を散り戦ひあきら操引よま
 そ引たりけれ上杉勢ハ昨日の軍に勝負つらむ相引よ
 引よを無念ふあらひ處あまばを森勝藏打負
 て退くぞ一人も餘ままどと追掛るを新津丹後守安田
 筑前守かき制しけるら敵の軍立昨日よ切なれり子

細ぞあらん油断して不覺をとるあとのさむきども逸
 る逸も若武者あれどもも擬疑を馬を進め
 て一同に川へざんぶと乗込たり森が手の者逸足出
 る逃けるを上杉方あら實に敗れて逃るぞや遁をかく
 と鯨波を作りて追かけたり新津安田ハ氣をかせ引
 返して敵の鹽合を見よやと呼もり川端より敷て
 味方を招く處へ森が手の兵士ども切めて上杉勢の後
 よあせたりけりやと嘯とわらまて掛出たり上杉勢ハお
 もひぬよりけりあらのつれ間よ爰まで敵の寄つらん實
 油断してなりと狼狽してまて亂れたんとあ
 ちかどゆさけり謙信よ引廻さきて古武者あり山岸右衛

門尉と名来て真先に進と大塚各務を目よかけ切
かくる大塚各務のりもつて引退けが伴久左衛門関を
作りつて鐵炮をつるべたあしに放ちかけ面もあし
切るかくる上杉方敵を左右に受七轉八倒して戦ひ
ける處へ森勝藏四百餘騎にて取くかへしをきまらぬ
く鐵炮を打うけ烟の絶まらぬ長柄の鎗をたくき立
ぞ進みたり蠣崎彌五郎あしとまりさたぬ若者ど
めは振舞や命ハ一つ名ハ万代引あしとまげまし
伴久左衛門と打くか安田筑前守これを見て敵の
方便もや知たり馬を突くを絲落させ真中と打破
と鞍上と突立上りて下知されバ日頃の詞もあし

く今日眼前の剛臆を敵味方に沙汰をらせ世の語よく
さとなりあんと口惜し連も死る我身あり上方武士
の肝をひきて呉やと心々に思ひかへし森が新
にかけ向ふ實も越後の壯士ハ身も健も骨も天晴
天晴と安田子褒られいよく猛り振舞やど森旗本
崩れたち百餘騎をうり打たさる上杉勢もあし烈し
く切かきせバ大塚各務も命をかりし爰を味へし若
めは共と主税伊織ハ左右に引るか鎗を取てかけ向
ふ隙もあらさぬ合戦に安田が手の者散々に打破られ
右と左へ崩れたる蠣崎彌五郎踏とまり逃行味方を
あらしめをのれらる何の世を頼もそ逃走るを今日後

を見とて、いづれの臆病りのを何とて屋形に扶持し給ふ
へきぞ思ひきれやりの共と大音聲をなげまうりけ
獅子王の荒たる如く走り廻る上方勢もこれを見と類
ひちりせある勇士哉とわめぬればあを無り多上杉方
まをく川端まで追詰られ總崩れ、二崗を立を見て岸右
衛門尉鎗を大地に突たて、爰を一足はとも引退さて
ら長く弓矢の名を朽を我をさよや人々々と聲をあげ
つとあり立當るを幸馬人のさうあもあく切て落して
首を取突ちあててら馬を跳らを跳れら主も鞍より落
おのせは起しおたてばあそ乍首をかきさくなりけ、子
處へ安田筑前守馬を飛して馳うくさつちまて命を

いむぞや早戦死せよやと手負し猪の荒るが如く走り
廻れ、越後勢まうと氣力をまう盛かへしく右に當り左
に拂ひけるが山岸右衛門、大塚とさう向ひ十文字の
鎗と大身の鎗電の如く突合なるが、わうおわいけん山
岸が鎗は十文字大塚が鞍をかきさて動うね、鎗あげ
まを大刀を抜き切ちわうを大塚をいゆと踏込て突
らあゆまう、山岸が胸板突貫れ終に馬より落さけり
礪崎彌五郎くと見と馬を跳らを大塚に走けり、まを
森が侍西尾伊三郎彦坂銅助わけよりて生捕らまんと
組付と彌五郎りの數ともせ、捻倒し上よりうんと
押付れら西尾彦坂二言とわを其、息絶死してなり

然とも彌五郎立ちあがらぬ是も同く倒さぬ安田
筑前守もろくに見つけ鞭を合を走寄彌五郎を引
起せば手も負べつろせと尋ねば西尾彦坂を押
解し時陰囊を吐く蹴れをのけぬら氣の遠くあり
くおりと打笑ひ跳り上むくあつてび馬に打乗は安田
も喜び猶も打連持さるる安田惣次郎崗る味方を助
けつ静々と引るるを森勝藏と見付られは安田
總次郎能敵あり我討取んと大長刀を打り只一をぬ
あつ切てわくる伐總次郎振かくり推参ありと云ふ
に大刀を以て切拂へば森の馬の平頭三寸むり切下
たり馬を手を負狂ひまはせむと主いあつらと鞍に居て

鎧ろろろ長刀取あを又難ゆあを太刀に拂ひ
太刀をわがし切るるを以て開き難ふも双方
上手の若武者が軍さる様よん類あく見えてなり然ど
も森が運や強りけん安田が流よく打太刀をさつと
外して空を切を其隙に安田が横腹を上様よくひけ
せら總次郎鞍に居らば馬より落ちぬは森が郎等走
より終よ首を取るる安田討まて上杉勢立足めあく
敗走す

遠藤大隅守奇計の事
并登坂安田美戦々死の事
上杉方森が伏勢よわけあやまされ山岸右衛門安田總

次郎戦死し々々バ總軍崩れ立一人も残らば討るべ
かりける處に安田筑前守を救ひもつりに味方を援
けし川を打つり東の岸よりあきたる味方の陣へ走
入て息を繼後陣に扣えし新津丹後守登坂刑部少輔を
遠く味方の旗を守り居たり々々初ハ西にけりし旗
ウのりし東にけりしを中あて西とあり東あてをりし
めら然ら兩陣入亂れ軍ありと覺えたり斯に待も
心苦しいざや今少し押出して勝負を見んとあり々々
處よおもひもよらば松原のあまより黒烟天を焦し
く燃立たり是ハそも在家の民が手過りと見るうち次
弟に燒暮りける猛火の下より関をつくり鐵炮を放し

かけ月二星の旗かたて五六百騎かやどわし出した
し新津丹後守をを見りし登坂どのあまら美濃
にて名を得し遠藤と覺ゆるゆりゆりけりし不斯まで
寄たりけん随分味方に用心せしめたるを今日
敗軍の兆ありや々々我等が死まざる時ぞ御邊と我等
と生きたる月日と替はれど死ハ共し今月今日不思議か
まける契うを御先仕る御免あま刑部どのとゆひも
果ねし馬駈出し十三束三伏の鳥獵矢取と打番ひ切て
ハ放し切らるるあし矢庭に三十餘人射たはせし刑部
ら鎌鎗をうくと打ありし四方八面に突立れば遠藤が
手の侍ともまあし白けし見えける處へ馬烟を蹴たて

馳來る勢あり是ハ誰と能々見れば先ハ川を越と敵を
追却と敵ハ敗られ味方の勢あり遠藤ハ新津登坂を
餘さずと採よめめど攻付れば新津登坂も今日を限と
と戦ふより互ハ打合太刀の鋒より火を出せば鏑も碎
けよ目貫ハ折よとせり付く切合ふも修羅帝釋の争
ひも是より過とありを越より實や年來鍛錬を越
後武士と琢磨の功を積たりし上方武者命ハありま
名を惜む森勝藏長一ハ川を渡りて馳來り大塚伴を前
後ハ立昨日の耻を雪ぐんと透間も何れを責來る安
田登坂敵を左右ハ引受あぐらちともひるまの戦あり
ちハ安田と登坂たゞ二人髪をうだして顔よりけ

流る血はと面を汚し森ハ遠藤ハ近付てこれを討ん
と紛らひけり新津丹後守蠣崎彌五郎を待つけ今よ
生ハかあしぎ也のどくらハ葉武者を切と何れを森
勝藏ハ近付ハ組て落と首をとれ縦令手にあまハ落
のどくらハ構へと心ハ掛よと示し合息を勞さどと
走めくる伴久左衛門ハ新津を目にけ大太刀を真向
にありと撃てかゝるを丹後守莞爾と笑と久左衛門ハ去
を退ると四尺二寸の仁王清春たひらあるを振めし
只一刀と拂ひ切あぞ切たりなり蠣崎ちるのみ是を見
る天晴伴の久左衛門さきけら打漏しつる今ハ退さ
すと走來り右手の肩先より肋をけけくると突ハ鬼

神を欺く久左衛門尉と仰よるりゆへるを丹後守
 太刀をあり上と首と打との戦ふ森が從兵亂立乍一
 条の道を開きさるる小より蠣崎も新津もあつを切ぬ
 け東をさして引く行森勝藏あつを見くあを最惜や伴
 久左衛門尉武勇といひ智謀といひ尋常あつぬめのな
 了りか運の窮めは哀しきよせをて骸かくせよと傍
 引取一堆の塚乃主とをありてなりあれを見り此難
 有森が志やかゝる大將の下に立りの誰りハ命を惜む
 べさく余所の袖をせぬし乃子遠藤と森采女とい安
 田筑前守登坂刑部少輔と追つ追れハ戦ひさるり安田
 ハ古兵の打物達者突くとぬる槍を切折真向さして射

る矢を拂落し花々けは戦ふを森勝藏とつと見味
 かに取くハ能武者ありの敵とてハ悪き安田あハ大勢ハ
 中よ取込打と取中と下知もはは大塚主掾各務伊織うけ
 給もつと返辭して三百餘騎むらゝむのとさるりゆへる
 安田主從十三騎を中よ取あハ一揉めんさるると引る百
 騎はらと終る五十騎をを負つ安田も七騎うたもさる
 た六騎死に狂ひに狂ひまはる森采女あつとらよりよ
 せさたり真一文字ハ安田ハ切り安田ハ采女笠よ志
 るしを見くあれも森が一族あハ願ふ處と飛切ると無
 手と組る兩馬の間よとと落筑前守ハ大力あり森を取
 と押え膝よ引く首をぬんとあつる時よ采女らえ

や業心まきて下より刀を抜出し安田の腰をさりと突けられ
 る少ゆるむじ處を刎けし上より束縛して遂に首を切り落
 を安田うたげて此手いさして破さるる登坂刑部少輔はか
 た鎌の鎗を打り前後左右に突たてし猛虎の如くあれま
 りりいかに森の手ゆり此多く討ち流るる血混々として
 杵をもちたよはしつて倒し屍ハ箒をたたくておびた
 相従ふ兵士七十三騎のつとむる名を得しりのあれを駈
 して返して返して駈東西南北よと廻りひまひりとも
 見えばこそされどもその身鐵石にもあらずおれは五十餘
 騎はらや討れ残るはなごり二十餘騎真丸よとあてて登
 坂刑部が最期のいささ成能々見覺のちは手本にせよや

と大音よのじを廻りて戦へが森勝藏あをれ敵やいど討取
 手柄あをを中と例の長刀水車よ廻してあとりあつる刑部ハ
 森と見あふりも願ふ處と大よ喜び御大將にけりあはれ上
 杉り侍は登坂刑部少輔國繼あつて見參せんと名乗るけ鎌
 鎗とりて突つる勝藏あをを聞きしも景勝が侍あらば長
 一ふいあをね敵ぞ罷り退け慮外めのと怒り聲は叱り付猶
 もあつんと長刀を打りし進まけむら刑部少輔縮商人の三
 左衛門が悴めが分外の言を聞きのか刑部が鎗先受る見
 けりしとあつてさ穂先の稲妻よ勝藏ひりり危ふき處よ遠藤
 大隅守が切るるおれを殺弓よ登坂弓手の肩を射られしか
 が刑部まてしひらんと見えたるを勝藏得たりと踏込る

まゝ打拂ふ長刀は刑部膝口を切られ馬より下へ落
 けられ勝藏飛をり遂に首をうちてをれむべし登坂刑部
 少輔今年四十三歳遠藤が箭にあはらば森もやんと討るべし
 軍の運は是非もあらず勝藏登坂を討取て是は上杉方
 も名譽のゆゑ也新津蠣崎を討りて安田筑前山岸右衛
 門のつゞきも空き侍をるを今日の軍は討つるは味方に取て大
 たある仕合あて上杉方の不運あり此勢は奥深く攻入て春日山まで
 あつてつめんと勇まふのやんぞ進み上杉方ハ力をあつて
 角て軍をうぐりてかたどと七里引退る陣ををり春日山へ
 注進櫛の齒を引がでり

重修真書太閤記八編卷之二終

重修真書太閤記八編卷之三

上杉景勝魚津表歸陣の事

并馬淵浮見及傷始末の事

天正十年五月信州越後の堺ある小田切口の合戦をい
 めハ森勝藏敗軍をいが如くなりしも遠藤大隅守の計
 策ありて終に勝利を得上杉方あり名ある物頭山岸
 右衛門尉安田筑前守登坂刑部少輔あど戦死せしよし
 越後方大い力を落し新津丹後守蠣崎彌五郎あんど
 心を猛しといへども敗軍に引立ち中田畑より東を
 ぎて落たりしかば森勝藏遠藤大隅守此勢に乗じ上

杉の本城春日山へ打入べしと其評定まありあり
 今此古戦場を考ふるに關川より十餘町ありて化粧
 坂新田といふ所より廿町余にして小田切あり白
 田切坂を越谷川をり二俣村熊戸村大田切川大
 田切坂大田切新田小野澤村關山驛ありこれ迄
 關川より三里あり關山より一里半ありて松崎一里
 廿九町ありて新井二里半ありて高田一里ありて中
 屋敷これ春日山の持屋敷あり關川より通計十里と
 云然も軍行二日路あり
 新津丹後守蠣崎彌五郎等ハ敗軍を集め半負を勞り防
 戦の用意をあすといへども國中人氣騒立く催促不應

敵陣を引去て七里に陣を取春日山へ注進せしむる春
 日山の留守居鉄上野介杉原常陸介岡野左内本莊出羽
 守父子以下大に驚き越中國の軍のまが勝負決着せし
 然る處小信州の森勝藏寄來りて關川を打越小田
 切大田切の境に亂入する由あり然る當城迄無下程
 近し早く人數をさし向て新津蠣崎に加勢を乞ふ誰
 罷向ふと信州勢を追拂ひ申べしや面々の意見を承を
 了すべくゆと云ハ甘糟近江守清滿進出く申くる様
 蒲原郡の新發田治時いまだ平均せぬへハ古志三嶋
 新羽魚沼の衆ハ出陣定めて難義をかたさるべし依て

誰彼と申に及む其罷向ひ中べいと申るもより鉄
杉原以下何も大に悦び然を佐藤平右衛門尉を差添中
へきに評定一決甘糟近江守布施次郎左衛門志賀與
三左衛門三千七百餘騎を卒小田切口をさして發向
以又越中國天神山少くハ柴田勝家前田佐々と合戦を
あし隙をかりける處へ小田切口の軍大に破れ敵國
中へ亂入しゆのそらら山岸登坂安田等の歴々多く
戦死せし由を聞れ景勝大に驚き當家越後の國を治免
しより以來本國へ敵を入し例か景勝家督の今に至
て春日山近くまで敵を入立んと末代まごの耻辱あり
切ハ此處を棄置一先本國へ引返しべしとて宮崎は勢

を遺し魚津の加勢と其身ハ天神山を引拂ひ本國さ
して歸陣あり此事魚津城中へも中遣ちしつと吉江
兄弟河田豊前守中条寺嶋龜田藤丸山本竹股若林等の
人々寄集りいりあも小田切口の軍破れ敵國中へ亂
入せんを疑ひあし左も有んは魚津の城の如き二箇
處も三箇處もゆへ打棄れ歸陣あらんと尤其理不當
て覺えゆ夫に宮崎に加勢の衆を残り置きゆを大將の
心中實に察し入るゆたり我等ハ元來此城あく鬼も角
もありゆちんと初より思ひ切てゆへ大將の御坐ま
まと御坐まさるとによりて志を變じ可中哉織田方
の勢たとひ如何様ふせゆ共鎗長刀の目釘矢種王藥

のあらん内々虫一つあても織田方よりハ入申す叶
 ぬ時々花々敷一戦して潔く戦死して日頃の君恩ハ
 報むべしありと勇氣凛々として見えてたり寄手の大
 將柴田勝家ハ小田切口の軍に味方打勝し由を聞きて
 荒武者と世ハ知まじ森の小冠者めハ先を取まじと
 の口惜さよ信濃侍が越後へ容易く亂入せしに我等越
 中の小城ハ支えられ越後堺にだも入得ぬものや
 しさよ景勝の天神山を引拂ひしを以て思へば實ハ春
 日山近く森の小悴めが打入りあらん然ハ當城を一時
 攻み攻落し一刻も早く春日山に打入り悴めハ鼻明せ
 んと怒り天正十年五月廿九日前田又左衛門父子を宮

崎の押まさしむけ佐々内藏助ハ本陣の兵糧を守らせ
 勝家たハ一手二千八百餘騎魚津の大手にハ寄て關
 を作る城中みてもあかどく鯨波を合を鐵炮を放ち黒
 烟の内より矢繼早ハ射出し手痛く防ぎ戦ひたるに
 了寄手三百餘人討ちて城ハよける色もたし四月を
 ぬより五十餘日ハ餘籠城あれハ兵糧も今ハ盡ぬ
 と思ひしに其氣色も見えざるささりて勝家も責
 めくみ此城の体をみるに力攻めハ士卒を損ずる計
 なく其詮あるべかり爰ハ一つの奇計あり是を用ひ
 て見むやと思案ハ早カ引螺を吹き軍勢を引上本陣さ
 して引退す吉江兄弟が勇氣屈をハ河田豊前守が義心

龜田小三郎が忠信のついでも天下小類ひまきある侍か
まぶ鬼といわれ勝家も案に相違たりしなり抑勝
家が近習し浮見小才次といふ者なり小身あれ共武邊
の心掛厚く万事たしあを深かりし主の覺も他
殊ありさまし浮見が傍輩小馬淵又市といふりの小才
次と無二の親を結び兄弟よりも猶心ありぬ中の交か
然るにこの頃又市仁王清眞の太刀を求め得て試
見る小無双の切物あり二胴々の小及む立木横竹
何あくも手に覺えなく切々れば秘藏かさくなく天晴
るざりの近日出陣あらば随分手柄をあらをせべけれ
と心は満して居たりたり或日馬淵と浮見と出會せし

折節の挨拶をたり又市小才次よりなるはあの程仁王
の太刀を求め得るゆ寸ハ二尺八寸砥かど少く鐵色
うのうしく試すゆ小心のゆるぬ際もあしと語れば小
才次あきりに羨ま夫ハ一段の事あり武士の心掛ハ一
に物具ニハ太刀三に馬とやてゆへども太刀を以て弟
一と及殊寸もよくゆ某ととも同し心親々より持傳
えゆ品はく事かくと中にゆえぬとも猶厭たらぬ心
にや何うあとおりの欲ハ絶むあをれ一見仕ゆん
中といふ又市も子細ゆも明日御覽入可中とて行
まらま頭も其目もありしらバ小才次又市宅へ行向
ひ案内して坐敷に通る一往の辭義終りける時又市刀

を取出し小才次が前に置小才次取りておひのりさ
 半ぬさそ是を見るに沸の心をさし此葉の上は薄雪の
 ありかりたる如く地青く又ハ白くようふ美事ある作
 あれば小才次おろろわさぐとて是を抜ちあし立
 見横よ見打もをさほ守りたる又市も我刀を親女の
 かくまぐに褒るを喜び扱も打見より又切味のよりあ
 さと此間二胴を試してゆり手答へもあく切放し砂ま
 て六七寸も打入るゆとゆへ小才次太刀を弓手に取
 直しいろにもく無うりくと云つ暫見とさく居たり
 けり見わけ見あろし手に取て詠めり思もん知む
 又市り真額より臍は迫切割たれば哀むべし馬淵又

市二つにありそそのまゝ息ハ絶たりたり小才次も大
 よ驚きこそえりうふ誤たり如何にせんと十方に暮け
 る處へ馬淵若黨藤堂與一圭の敵のかさどと切掛る
 小才次聲かけ申れあぞと云とゆりともども更ハ聞
 入る主を討し浮見小才次何を聞んと又切あるを
 拂ひのけ引つ返しつあらふ内は柴田々家の大目付
 中村與右衛門駈來り事の始末を聞糾し兼ても知たる
 浮見と馬淵々懇意の中也何とて是を討果は心を遺恨
 のあらん何さま太刀に見われし思もぬ誤それを仇と
 藤堂々打も理さうあうら我等り見てはこのまゝに其
 方々主の仇を討ちがごとく打ハ何時にてもある事よ一

先殿へ言上し殿の御さし圖に任せしべしとて小才次
 を召連中村與右衛門を登城したりたり
 仁王清真の銘盡に仁王三郎と號を龜山院文永建治
 弘安の頃のりは也と云又後堀川院御宇寛喜の頃周
 防國住人と云然るに近き頃の鑿定家の説に周防
 の清真の建武前まゝ清忠の子の清真を貞和の頃ま
 た永正の頃にもありと云馬淵又市が求得たる清真
 を何の作り知べからん

柴田勝家奇計を用ふる事
 并溝口半左衛門使節の事
 淨見小才次馬淵又市所持仁王清真の太刀を一覽し

あれを賞翫の餘に誤り又市を又傷を實み以て珍
 事といふべし刀剣に就て袂災と云へ又市が臣
 藤堂與一こそを見く小才次を討棄んとせしも眼前主
 を討しりの也更に猶豫まじりらざる理あり元より
 主と小才次と無二の信友といひ遺恨の勿論當坐の意
 趣もなかり仇にこそ仇ありけり故に中村
 與右衛門これを勝家に披露しける小勝家これを聞て
 何れも淨見と馬淵の同役にして入魂たるを我も知
 人も定りて知つらん何の意趣も恨も有べきを終を
 是の全く二王の刀のあり業ありん去はても勝家
 身も命も代らんとし忠義の又市を誤るこれを

殺しつゝさへ大事の前の損あるに今まは小才次も腹
切をてハ勝家が損を重ぬる道理也去とて又市も妻子
家來の心も不便なり一人も残さば呼寄るとて馬淵
妻子所從親屬をむく勝家が前に呼ぶ人勝家おもて
を和け扱も不慮の事はと其方とも的心中ありく察し
入たりたゞ又市を失ふさへ勝家が身に取ら大きを
る損なると小才次も腹切する其方共は取をて討
ててハ又勝家の損を増道理あり依て又市を討し小才
次を我は呉よたゞ夫はてハ勝家ひのきの沙汰とい
をれんよりて浮見の所領ハ及む家財雜具を
べく馬淵は取るたれば兩家を一家にして又市

子息に家督をすむべし其上小才次を勝家が側小置
城より外へ出さまうと云々ハ馬淵が親屬中なる様
如何あも又市小才次は討れとゆへは小才次を切さ
とゆへも若まは戰場にて討てゆへは誰を仇と
かへき鬼も角にを殿に奉り命也殿のさゆと仰
られんは誰の心を残さぬき勿体ありとと請して退出
しなれど勝家大小喜び小才次を側は呼ぶ人又市は
に汝が知行を與えて汝が命を贖ひつゝ今ハ心安
されども勝家側をえあるべうとて手元も召仕
せけるか誤といひあがら無二の朋友を手に切け其
方なり刀脇指をもちて切つてとて刀剣をふさぐを

然るに今度この陣中にめしつきたりなれば此小才次
を以て一方便宜にたれども使者を遣はして事の
様を見たりやとて溝口半左衛門を魚津の城へ遣はしけ
る半左衛門の草履取一人は小童一人は具して城門
にいりて是の柴田修理進侍は溝口半左衛門と申も
のあり勝家より城の大將より入り子細ありし因て伺
候しつゝゆとりなれば吉江兄弟河田豊前守竹股三河
守龜田小三郎名田采女正横田常陸介參會して勝家よ
り使者をさし越たり是を呼入る事の子細を聞さらん
も武士の道にあつたが軍中ハ使者の禮儀ありそ
の人のよりて式作法あるし溝口半左衛門如何体の

身分あり是を知人ありや如何といひなれば河田豊前
守龜田小三郎二人言葉をそろへてけしハ使者の身
分ハ我知れざるがら勝家の使者と名乗れしハ勝
家と同様ハ取扱ふべきなりこの使者の趣を一應門
外より子細に尋ねその次第はよりてまゝ取扱ひし
べしといひ竹股寺嶋あれを聞河田殿龜田殿の御了簡
まゝさまお覚えゆいづきにも門外ありて事の様を尋ね
て後のともいへ然るべしと申ければ横田常陸介何さ
まその趣當前の事と存ゆ然ハ某罷向ひ承たり可なり
として横田大手の門ハ立出是る當城を預りし上杉侍の
内あり末席なる横田常陸と申りのは上坐あり吉江

兄弟のりのゆら柴田殿より御使者を立られの事何
 の御用にゆりこのゆら弓箭を取て雌雄を争ふ際
 ゆまの御使の趣を荒増承をりゆ上りて御面會べく
 ゆと中に因る某爰迄罷出ゆゆけき半左衛門門の際
 ちて近々と打より如何にも双方楯を突竹束をあらん
 日夜に勝敗を争ひゆ時あふ使者を参らゆ事の御
 不審尤も存ゆ去あぐら勝家付ゆら魚津の城ハ上杉
 方ゆく弓箭巧者と世ハ沙汰仕る吉江殿り持をゆに合
 せて此程度々參會仕ゆゆゆゆも城方ゆく勝家手勢
 多く討をゆく夫も付上方よりゆ越れゆ吉趣を吉江殿
 ゆ試ゆゆやとて半左衛門を使に立てゆ横田殿吉江

殿と優る劣りハ有まゆくゆへとも吉江殿もやせゆの
 口状を横田殿ゆゆゆさんと勝家ゆ付ゆ昔に相違ゆ
 まる上方よりとやせは右大臣殿の仰也ゆゆゆ堀
 あゆまゆべさ理もあゆゆ但使者ハ使者の禮儀ゆ主
 人あゆ主人の作法ゆゆゆ横田立歸り吉江ゆ
 ゆくと告げゆ吉江暫く案ゆ何ゆゆゆゆも使者に面
 會せざらんハ無骨ゆ然ハ是へ御入ゆへとも横田を案
 内ゆ出ゆけきゆ溝口横田ゆゆゆ本丸入書院に通
 了客坐に付ハ床ゆ置鳥置鯉まゆ大臣殿を迎え奉
 りゆ禮を設け然して城の本人吉江兄弟直堊上下の出
 立ゆ主人の坐より少ゆ下りてゆあまる是ゆ景勝

水陸記の終巻三

ら城主也吉江ハ城の主ありばと云々をあらわしと形
 あり半左衛門開小坐小著一禮畢してやぐるハ右大
 臣家の御口状よりゆへども取傳やゆら柴田修理進小
 て其柴田の家臣溝口半左衛門あり然るに御坐席の体
 ハ大臣家御成の御設けと拜見仕りてハ半左衛門式の
 罷出へハ御結構と見奉らば何事と著坐仕るべし
 御指南頼入とゆと慇懃と述べら横田ハとさより満
 口どの左様小仰られゆてら果しぬくハ今日ハ半左衛
 門殿を柴田殿と心得ゆ柴田殿ハ右大臣家の御名代
 と存ゆゆより城中不調にて憚入とゆへども形むか
 さいさ、か支度仕りゆ彼是と御會釋あく件の坐敷に

御着ゆべくハ箭王の飛かをゆり引かえりハ様ハ長
 閑く御對坐仕りゆ事世ハ珍敷事小ハ早々御坐ハ御直
 ゆハと勧めければ半左衛門御亭主方の御心入と
 ら穩し御振舞は近頃痛入とゆ修理ハ心にも定め
 て荒々敷御舉動やゆらん存ゆ品かよりか
 りる御りとぬしませと耻入るゆ某と都近く生立ゆ
 へども武家の進退禮節更ハ覺悟不仕かくの如き御坐
 敷に始て罷出ゆと云ありら横田ハ指南の坐に著ら
 斗毘布の引くハ搗栗の手搦作法とさ引ありハ
 てのち吉江兄弟一禮をとり右大臣家とやを天下の
 執柄とすハ其仰と云ハ取も直さハ綸言を比へ

中へ〜吾等ハ陪臣にてゆへに論言を蒙るべき身ゆ
 ゆも但態と御入のゆを御請不けり失禮にゆよりて
 如此の式まぢり及びゆ如何ある御事にゆり覺束あ
 ゆと少けまぢり半左衛門さんゆ此度右府の仰ハ管領入
 道去天正六年又卒太の後四年に及びゆ景勝上京の沙
 汰あく自由に國務を執行いたさまゆ条朝廷を蔑如を
 らまゆああぢり此事を問糾さんゆ爲ゆ使者を差下
 一ゆへに堺目に城をかまへて籠城又及まゆゆ弓矢取
 身の習あれバ一應ハ合戦をいへてゆへども早く景
 勝上京りて朝家の公事怠慢あく御勤めあるべくゆ
 どの事にゆぢりなれバ吉江兄弟承をり御使者の口状た

一ゆへ心得てゆた〜我等ハ景勝が郎等にゆ景勝へ
 ちてのち左も右も御答やべくゆとてまぢり半左衛門を
 一問へ通へ休息させけり

重修真書太閤記八編卷之三

